
【ドラクエ小説】 死んでしまったトモ

藤後ユチカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【ドラクエ小説】 死んでしまったトモ

【Nコード】

N4289G

【作者名】

藤後ユチカ

【あらすじ】

村は、ある魔物のせいで寂れてしまっていた。少年、チボは魔物を倒そうと立ち上がる。勝ったのか、負けたのか。それとも――。ドラゴンクエストを元にしました。

【死んでしまったトモ】

「――ばあちゃん。これ、オイラ食べてもいいのか？」

「いいんだよ。チボにいっぱい食べてほしいから」

「で、でも、そしたらばあちゃんが」

「だからいいの。ばあちゃんはもうお腹いっぱい」

そう言いながら、チボの皿の上に自分のおにぎりをのせてくれたばあちゃんの顔が今でも鮮明に覚えている。

目を細めて、チボがばあちゃんのおにぎりをおいしそうに頬張る姿を何とも嬉しそうに見ていた。頬についたご飯粒を、楽しそうに取ってくれた。

この時、チボが住んでいる村は食物不足に悩んでいた。まだ幼かったチボは何のことだか分からず、自分と同じように腹をすかしているはずのばあちゃんがなぜ、いつもご飯をくれるのか不思議でならなかった。

と同時に大人達の間で、揉め事が多くなって来たのだ。チボの父親もその一人。今日も村長との話し合いに明け暮れる。

「俺ら家族はもう、この村から出て行くッ！」

「そんな事は許さん！ 村から出て行っていていいと、本気で思っているのか！」

村長と父親——おとうの喧嘩をいつも近くで見ていたチボだったが、どういうことだかまだチボには分らない。ただ、おとうはこの村を捨てようとしていた事だけは感じる事が出来た。

おとうの今まで見たことのない姿がいつも目の前で繰り広げられる。それはまるで獣同士の縄張り争いにも見えた。

チボ以外の大人は全員やせ細り、誰もが生きる氣力を失くした。それはまるで生きたカカシ。

大人同士で争い事が起き、自分が生きるための食料を求め人を殴る、蹴る、切る。今まで仲良く協力してきた太陽のような陽だまりはなくなってしまう。まさに村は崩壊寸前。

なぜこのような事になったのか、この日まで誰も分からなかった。原因を突き止める氣力もなかった。ただ一つ、畑や田んぼが何者かに荒らされている形跡があるので、生き物である事には変わりはない。

犯行時刻は夜であろう。昼間はそれでも働こうと頑張っている者たちもいるので、できるわけがない。

時は丑三つ時。チボは”化け物”の存在をこの目で見た。

暗くてその姿はよく確認できない。しかし、化け物が畑や田んぼを荒らしている姿は目に焼きついた。

虎のようなシルエットが闇の中で浮き上がる。あいつが、オイラ達の村を崩壊寸前に追い込んでいる怪物——。

気づかないうちに、チボは齒を強く噛締めている事に気づいた。もう少し、オイラが大人だったら、強かったら、今すぐあいつを倒しているのに。

何も出来ない自分に、苛立ちを覚え齒痒いさが残る。

それから十日後。あんなに優しくったばあちゃんが死んだと同時に、どこかの旅人かは知らないが、モンスターを連れた男がやって来た。村長と親しい村人が話をしているのを盗み聞きすると、そいつはなんとあの怪物を倒すらしい。無理に決まっている。オイラが倒すのだから、あいつなんか化け物を倒せるわけがない。

しかし、村の皆は旅人を頼り、安心し切った顔をする。なんでよそ者なんかを信用する。まだあいつが村の為に尽くすかまだ知らないんだぞ！？

そう思っているうちに、チボは旅人に激しい嫉妬を覚えた。あんな奴なんか、一生帰ってこなければいい。

一週間後。旅人は帰ってこなかった。ははっ、いい気味だ。村人達はどん底に落ちたかのように嘆く。旅人が起こした不幸か。怪物は今までより酷く畑や田んぼを荒らすようになる。この時チボは十歳。村でただ一人の子供だった。

——それから二年後。チボはとうとう決意する。

「オイラがあいつを倒す」

手に握り締められた鍬^{くわ}。二年経った今でも、畑や田んぼは荒らされ続け村には瀕死状態ばかりが続く。

山奥から引っ張っている水があるからこそ、生きていけている今、乾期等で、この水がなくなったら村はお終いだ。この二年間で村は寂れていった。昔はあんなに元気で温もり溢れる村をこうしたのはあの怪物のせいだ。そして、ばあちゃんを死なせたのも……。もう大人になるのも待ってられない。今、オイラが化け物を叩く！

二年前と同じように、時は丑三つ時をまわった。皆はもう寝静まっている。

村が荒れてしまったせいか、昔あったよろず屋も店を閉めた。宿屋もない。あるのは教会だけ。

その為、装備は至って簡単。農具の鍬を手に持っただけ。そしてなぜか背中にこの村の名産品の”コワモテ力カシ”。後は幼い頃、村で遊んだ時に見つけた”メガンテの腕輪”。

さあ、来い化け物。呪文等が使えない代わりに、一週間で集めた薬草を大量に袋に入れた。準備は万全、いつ来ても大丈夫な心構えだった。

暗闇の中、二つの目が光る。鋭い嗅覚で相手はこちらを認識したようだ。鋭い牙がこちらを向く。低く鳴きながら、化け物はこちらへ近寄ってくる。

今まで感じた事のない殺気。本気で自分は殺されてしまうのではないかと、頭に過ぎる。

怖い。体に突き刺さる化け物の殺気で体が動かない。緊迫感が辺りを包み込む。静かな夜が、悪夢に変わりそうな気さえしてきた。

「グルル……」

とうとう化け物の姿が見えた。化け物の正体はキラーパンサー。他のキラーパンサーとは絶対違う。所々付いた痛ましい傷はどれほどこのキラーパンサーが危険な人生を送ってきたのか、よく分かった。低い鳴き声が、「お前は誰だ？」とキラーパンサーが呼びかけてきているようにも聞こえてくる。

化け物はこちらに近寄ってくる。チボはゆっくりと一歩ずつ、後ずさりする。

こいつなんかにおされるな。倒せ、こいつを倒せ。
頭の中で何回も繰り返し、チボは鍬を握り締める。キラパンサーの瞳をじっと見つめて、瞳を閉じた。そして深呼吸。

「オイラはこの村のチボ！ お前を倒すッッ！」

叫んだと同時に、チボは駆け出した。小さくジャンプし、体重を鍬に乗せキラパンサーの頭を叩きつける。鈍い音がして、チボは一旦引いた。手ごたえはある。叩き付けた時の振動がまだ手に残っていた。

キラパンサーはこのくらいでやられるわけがない。乱れた鬘を直すかのように、首を振る。チボの必死の攻撃は効いてないようだった。

このキラパンサーは予想以上に強い。下手したら負ける。頬の汗が垂れ、鍬を握り締めている手に落ちた。チボは唾をゴクリと飲み込み、更に強く、鍬を握り締める。

「まだまだまだあああああ！！！」

このくらいで諦めたくはない。思いつき飛んで、キラパンサーの後ろを取る。

鍬を大きく振りかぶり、キラパンサーの背中を叩きつける。しかしこれもまた、キラパンサーには効いていない。キラパンサーの怒りを買ってしまったようだ。

「グルルルル……！」

キラパンサーは低く喉を鳴らすと、チボに近寄った。その近寄る姿はチボを敵と認識して近寄っている。目は既に赤く充血している。大きく息を吸うのが分かった。攻撃が来るといふ恐怖に、チボは身

動き一つできない。

「ガァァア！」

キラーパンサーの鋭い爪が無残にもチボの小さな体を切り裂く。

鎧等は身に着けてはいないため、服などは一切攻撃の妨害にもなっていない。切り裂かれた服からは血が、ポタポタと垂れ落ちる。チボの血が、地面に斑点を作っていく。

痛い。

これ程痛い思いをしたのは初めてだ。あまりの痛さに目がぼやけていく。そして更に死ぬのではないかと、死の恐怖がチボの心を覆っていく。

逃げたい。ここから今すぐ逃げ出したい。でも、今ここで逃げたら……。

「こんな思いをした意味がないッ！！！」

多少の痛みなんて、どうでもいい。どうでもいいんだ。オイラはあいつを倒すだけでいいんだ。

チボは駆け出す。あんなに痛かった腹の痛みもいつしか忘れ、ただ攻撃に没頭していた。

攻撃力が一ならば、千回攻撃して千ダメージを与える。興奮していたのかもしれない。本能が死の危険を察して何もかも感じなくしたのかもしれない。

チボの頭の中には”攻撃する”以外の言葉はない。なんで今自分は戦っているのか分からなくなった。

頭の中が、白く染まる。生臭い血の臭いがして、意識が戻る。白い

キャンバスに赤い絵の具を撒き散らしたかのように、チボの視界は赤い血で赤く染まった。

——これは、誰のもの？

見ると、キラーパンサーの爪には赤い液体がこびり付いていた。あんなに叩いたのに、キラーパンサーはほぼ無傷。

ああ、これはオイラのだ。

「ッ……………」

不思議と、痛みは感じられない。何故だろう、全ての景色がスローモーションで見えてチボを見るキラーパンサーの顔が見えた。チボは地面に倒れこむ。胸の深い場所まで切り裂いたその傷からは、溢れんばかりにチボの血が流れ出る。地面が、赤くなっていく。

涙が止まらない。このまま自分は死ぬ——。

何もかも、時が止まったとき、何かを舐める水音だけが辺りに響き渡る。

誰かが、チボの傷を舐めている……。ほんの少し残っている体力でチボは顔を上げ自分の腹を見る。

信じられなかった。

あのキラーパンサーが、チボの傷を舐めていたのだ。

それは相手への思いやりか。チボの傷を舐めるキラーパンサーにはさっきまでの凶暴さは感じられない。

笑いがこみ上げてくる。なんなんだ、なんなんだよお前は。

自分が情けなくて、小さすぎて泣けてくる。あいつは、キラーパンサーは今のオイラでは倒せない。

チボはゆつくりと起き上がる。体から血が垂れ、小汚い布の服は血で赤くなっている。

キラーパンサーは一步引き、小さく喉を鳴らす。目を細めて傷だらけのチボを見るその姿は、まだ幼い人間の子を見守っている母親のようにも見えた。

あいつは自分より凄い。だから負けない。この村の為に、あいつの為に、自分は勝たなくてはならない。

今まで雲が覆っていた月が、姿を現す。月明かりが一人と一匹を映し出す。

あんなに残酷に見えた血も幻想的に見えてくるから不思議だ。

チボは鍬を強く握り締めた。あんなに怖かったキラーパンサーが怖くない。むしろ、ずっと一緒にいた親友に思える。

「……これが……最後だよ、キラーパンサー。……お前の名前はなんだい？」

聞いても答えは返ってこない。小さく鳴いたキラーパンサーが自分の名前を告げたように聞こえたが、告げたとしてもチボには分かる分けがない。

穏やかな気持ちになれた。なんでここまで自然といわれているのか、チボでも分からなかった。

このキラーパンサーに出会えた事を、光栄に思う。

「行くぜ……！」

鍬を構える。キラーパンサーは重心を低くして、チボ――標的を見つめる。

チボとキラーパンサーは一気に駆け出した。お互いの影が交差する。

少年と一匹は月夜の中、一つに交わる――。
ツキガ、アカクソマツタキガシタ。

「……キラーパンサー……お前って本当、優しい奴だよ……」

地面に座り込んで、ほんの少しだけ親友だった横たわる屍の鬘を撫でる。

まさに奇跡だった。ほぼ無傷だった”親友”と全身傷だらけのチボ。なんで勝ったのか、よく分からない。隣に置いてある鍬は歯がボロボロだ。先っぽにほんの少し赤い液体がついている。

おそらく、たまたま鍬の歯がキラーパンサーの心臓部分に深く入り込んだのだろう。勝ったのに、チボはどこか憂鬱だった。とつくのとうに取れてしまったコワモテカカシが風で揺れる。

絶対手加減していたのである。ここまでのキラーパンサーならば、チボ如き殺すことなんて一分もかからなかったはずだ。

意識が遠のく。そろそろチボも限界が来てしまったらしい。

眠い。瞼が重い。視界がぼやける。ふらりと体が静かに揺れ、チボはゆっくりとキラーパンサーの隣に倒れこんだ。

” ありがとう ”、キラーパンサー……。

「――……ボ！ チボッ！！」

誰かが読んでいる声がする……。

チボはゆっくりと目を開ける。そこには村人全員の、チボを心配そうに見つめる顔が見えた。

オイラ……生きている。

「こんの大馬鹿！ キラーパンサーと戦うなんて……！」

母親が目を拭いながら、チボを叱る。怒っているように見えて、顔からは喜びが見える。

そんな母親にチボは小さく笑うと、また目を閉じた。久々に嗅ぐ家のにおい。とても安心できた。

チボは再び深く眠る。キラーパンサーと共に昼ねする夢を見ながら……。

チボがキラーパンサーを倒した事により、村は再び昔のような穏やかで優しさ溢れる村に戻った。

チボは生涯一切村から出ず、村の為に一生を尽くし、後には村長となった。

「どうやってキラーパンサーを倒したのか」そう聞かれた事が何度

かあったが、チボはいつもこう答えた。

「オイラの大親友だったからさ」

（後書き）

【後書き】

初めまして。藤後ユチカです。

この小説は、とあるサイト様に投稿した作品です。

内容は5000字に近いです。自分なりに頑張ったと思います。
なので、こうしてこのサイト様に投稿して皆様の意見が聞きたいと
思いました。

配役……というか、設定？ は、（ドラクエ5をプレイしていない
と分かりません）

後、『5』はローマ数字なのですが機種依存文字なので使えないの
で、普通の数字で書きます。

村↓カボチ村

チボ↓村にいた、犬と駆け回っていた少年

キラーパンサー↓主人公が仲間にするキラーパンサー

モンスターを連れた旅人↓ドラクエ5の主人公

ばあちゃん↓切り株の近くにいたおばあちゃん

です。ある意味で、IFなのです。というか、ほとんどどうでもい
いですね（笑）

それでは、ご意見などありましたら、感想をお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4289g/>

【ドラクエ小説】 死んでしまったトモ

2010年10月20日19時39分発行